

〈思想史の旅〉 法学部最終講義 (二〇一三年二月一五日)

危機の時代を考える——石牟礼道子の思想

岩岡 中正

はじめに——師恩ありけり

私はこの三三年間熊本大学で教鞭をとらせていただきましたが、このことも含めてこれまで私は多くの方の好意で育てられました。まずはその感謝を申し上げます。

《降るやうに師恩ありけり百千鳥》 (中正)

この俳句はかなり以前の私の作品ですが、「百千鳥」とは春になつて囀るたくさんさんの鳥たちのことです。私は、それこそ降

るようにあふれるようにたくさんさんの師恩（先生たちの御恩）によつて育てられたのだと、春の鳥の声を身に浴びながら実感しているという俳句です。

やや私的なことですが、感謝すべきはまず両親です。両親とも私立のミッション・スクールの高校教師でしたが、父は大学で西洋哲学を専攻していたため、私は小学生のころからいつも哲学や思想の話を聞かされ、カントやヘーゲルの名前は知っておりました。また私の文学好きは、英文科出身の文学少女の母の影響があると思います。その母の文学や俳句好きは、俳句が大好きだったそのまた父の影響だと思われれますので、私の俳句は三代目ということになります。さらに師恩といえはその一番

のものは、熊大附属中学で三年間担任していただいた吉田定俊という希有のベテラン社会科教師の薫陶によるものです。社会的歴史的知識あふれる先生の授業に私たちは魅了されて、私たちのクラスからは弁護士、新聞・出版社の他、私のような部類の研究者が出た点で、ややユニークだと思えます。

ともかくこうした背景で私は、子供のころからよくものを読み書く少年であり、関心は社会と文学にあり、大学への進路では色々迷ったのですが、父の勧めで法学部へ進みました。私は高校時代に小説をよく読み短歌も少し作りはじめていましたが、この文学好きの少年に父はむしろ、実学としての法学部を勧めたのでした。なお私が短歌から俳句へ変わったのは、大学時代の二〇歳のころからです。

(1) 近代 (市民社会) 思想にふれる

——九州大学法学部時代 (二〇歳代前半)

九州大学では教養課程一年のころ、まず「社会思想史」の授業に関心をもって奥田八二先生のオーエンなどの話を聞きまし。法学部に進んでからは法律学政治学と楽しく聴きましたが、文学部や経済学部でもかなり受講しました。御存知の六八年世代ですので世情騒然として大学も正常ではありませんでした。とくにこの年、九州大学に米軍のファントム戦闘機が激突するという事件もあって、私たちも考えることが多かった時代です。

法学部以外では、文学部で受けた「実存哲学」の鬼頭英一先生の素晴らしい講義が心に残っています。法学部の三年のゼミは具島兼三郎先生の「政治・外交史」でしたが、のちにややもの物足りなくなつて、四年次は政治思想史の竹原良文先生のゼミに入りました。

思想史はそのころから興味を抱き、三年の思想史の講義はレポート提出でしたが、「キリスト教と契約思想」と題して四〇〇字で一〇〇枚という大部のものを提出しました。下敷きは大木英夫『ビューリタニズムの倫理思想』でしたが、私が驚いたことに、竹原先生はこのレポートにひとつひとつ赤字を入れて返却され、私は今もこれを製本し大事にしています。竹原先生は、謙虚すぎる先生で、単著はなく、いくつかの編著・共著があるだけですが、その優れた論文を通して思想史研究で近代批判の新しい視角を樹立され、この先生の学風にひかれてたくさんの研究者が育ちました。私の研究など、この先生が示された方向に従ってほんの少し進めたにすぎません。

このころ大きな師恩を受けたもうひとり先生は、日本福音ルーテル箱崎教会の佐藤邦宏牧師です。この教会は私の下宿のすぐ近くにあり、しかも牧師夫人が私の幼稚園のときの担任ということで、私はここで九大のルーテル系の先生方や学生とよく学びよく遊びました。熊本大学出身の佐藤牧師は当時四〇代で元気で豪胆、若い人を育てる名人で、のちにルーテル教会議長やプロテスタントの諸教会全体のリーダーをつとめられまし

た。私は大学での西洋政治思想史の講義だけでなくこの教会で、ヨーロッパ近代市民思想の根底にあるキリスト教や契約思想について学んだわけです。それに、ちょうど竹原先生の四年次のゼミは、ロツクの『市民政府論』でした。私は既に三年の夏休みに、教養のときの憲法の斉藤先生の勧めでその原書を読んでいた。ただ、あとでくり返し同書を読むことになりましたが、その当時どれだけ理解できていたか心もとない限りです。とはいえ、この二〇代の初め、このように現代社会の基礎であり、また実現すべき価値としてのヨーロッパ近代市民社会の原理を学んだことは良かったと思っています。しかし、時代の思想は少しずつ近代批判へと動きはじめていました。

（2）近代批判とロマン主義研究へ

——九州大学大学院と留学時代、熊本大学へ

（二〇一三〇歳代）

二二歳で私は大学院へ入りましたが、そのころ竹原先生は近代（化）の負の側面にも注目され、いわば近代批判へと大きく舵を切られました。それは、竹原先生のルソー研究やフランス革命研究の結果であるとともに、やはり時代の課題や精神に敏感でこれをいち早く自分の思想史研究に反映された先生のセンスの良さだと私は思っています。六八年という時代と運動を、思想史研究という形で深く受けとめられたわけです。こうして

先生は近代のフランス革命への批判や、いわば反近代の思想家である、たとえばノヴァーリスやシュレーゲル兄弟といったドイツ・ロマン派の研究に進まれました。私も、大学院で竹原先生の新しいルソーの読み方を聴いたりしていました。『君は文学も好きだから』という先生の勧めもあって、イギリス・ロマン派のとくにS・T・コールリッジの政治思想の研究を大学院での研究テーマにしました。

修士論文では、「S・T・コールリッジの初期政治思想」をテーマに初期のイギリス・ジャコバン時代のコールリッジを書き、博士課程で後期コールリッジやW・ワーズワス、R・サウジーさらにはロマン派第二世代のP・B・シェリーに手をひろげ、博士課程ののちロンドン大学L・S・Eへ留学し、そこで近代政治思想のF・Hobbes先生の指導を受けました。またちょうどそのころ、一年の半分をロンドンで過ごしたトロント大学のK・Coburn先生（コールリッジ全集編集者）にも御指導いただいた幸運でした。

同時にそのころは諸学会との関係もできて、何より、研究対象のコールリッジと深く関係する「J・S・ミルの会」では、国学院大学の山下重一先生には親しく教えをいただき、またこの会と関連してちょうどその頃設立されたイギリス哲学学会にも参加しました。私は、「私たちはただ知るといふ欲びのためにここに集まった」というこの学会の設立時のアピールを今でも感動をもって覚えています。政治学、経済学、哲学、英文学、

その他ジャンルを問わないこの学問横断的なイギリス思想研究は、イギリス研究に限らず「近代思想」そのものあるいは「日本の近代」の問題を深く思想の根底から問う思想史研究の方法として、私の研究スタイルに大きな影響を与えたと思っています。ここで私は、杉原四郎先生、水田洋先生を知りました。杉原先生は俳句がお好きで作っておられました。学会で会ったりお便りでよく俳句のことを話しました。その後政治思想学会もできましたが、ここではミルの会でも御一緒の藤原保信先生に励まされたこともよく覚えています。また、このイギリス哲学会は、その後、創設二〇年を記念して『イギリス哲学・思想事典』（研究社）という大部の事典を出しましたが、その「ロマン主義」の項目を担当できて、何よりうれしく思っています。英国から帰国後、九大で助手などを経て熊本大学に着任したのは昭和五年、三二歳の時でした。熊大へ来ますと、ワーズワス研究の泰斗の吉田正憲先生がおられ、色々教えにあずかりました。着任後から「イギリス・ロマン主義」の研究を何とかまとめるべく努め、これをやると『詩の政治学——イギリス・ロマン主義政治思想研究』（九州大学博士學位論文、木鐸社、一九九〇年）としてまとめたのが、四〇代の初めです。

《冬に入る研究室を城として》（中正）
《徒労かも知れぬ学問雪降り》（同）

これらはそのころの私の俳句ですが、前者は必死に研究をまとめていた時期の句で、われながらなかなか殊勝なことだと、ほほえましく思い出しています。しかし実際、本当のところは、後者の俳句の通り、疲れ切つて精神的にも参つていたので、心血を注いでも、この対象の大きさと困難さに、徒労感さえありました。どんなに頑張つてイギリスの昔の思想家を研究しても、その思想系譜・背景やその他、そもそも英文のニュアンスからして外国人の私に十分理解できるわけではないからです。こうした無力感にさいなまれながらも何とか出版したというのが、実情です。とはいえ、どんなに不十分でもここで努力したことが、こののち思想研究の内容でも方法でも、石牟礼道子などの日本思想の研究を行う上でおそろしく役に立ったのですが、それがわかるのは、もちろんこの後のことです。

（3）現代日本思想へ（四〇歳代前半）

私自身、また他の研究者もそうかもしれませんが、研究者にとつて一冊目の刊行は、何とか苦勞してできるものですが、問題は二冊目です。何しろそれまで長期間研究してきたものを出し切つたあとで、さてこれからの問題意識の展開や蓄積が無いのですから。その点で、私の四〇代の前半から半ばにかけては、模索期でした。これまでのロマン主義のような反近代思想研究でいくか、それとも近代思想研究でいくのか。イギリス研究を

続けるか、あるいは日本研究へ行くのか悩んだのですが、さしあたり与えられた『日本福音ルーテル大江教会七〇年史』と『五高・熊大キリスト者の青春——花陵会百年史』（いずれも共編著、熊本日新聞社）の仕事をしました。これらは、研究というより地域貢献の仕事でしょうが、日本近代キリスト教史の勉強は、わが国におけるキリスト教の意義・役割り・課題を考えることを通して、「日本近代」を考えることでもありました。前者では、米国に残された宣教師年次レポートが、後者では、花陵会に百年分の日誌が現存していて、とてもスリリングな仕事でした。

ところがその前に出版していた私の『詩の政治学』を渡辺京二先生に謹呈していたこともあったのでしようか、先生の女婿の山田雅彦先生からお声がかかって健軍の真宗寺で俳句の講義をすることに（そしてそれが、のちの私の虚子研究の発端になります）、渡辺先生と石牟礼道子さんに初めてお会いしました。さらに渡辺先生の著作集の新聞書評を書くことになり、初めて通して先生の著作に相對することになりました。悪戦苦闘してひと夏かかってこれを読み執筆した苦労は今も忘れませんが、この仕事のおかげで日本近代思想への入り口に立った気がしました。その後、石牟礼さんの著作を順次読みはじめましたが、それはちょうど石牟礼全集『不知火』（藤原書店）が出始めたころだったと思います。どれも読み応えがありましたが、どう読んだらいいのか、私は専門のこともありまして近代文明

批評家として石牟礼さんを読んでいききましたが、それはそれとして面白いが深まらない、そこで文学者としてどう読むか、これを教えてくださったのは渡辺先生でした。『渡辺京二対談集』を読み返すと、対談を通して渡辺先生は、それこそ手とり足とりして教えて下さっています。こうして色々教えを受けつつ私は私として、近代批判と共同性のロマン主義の「思想家」として石牟礼さんを読み、「思想史」の中でこれを位置づけるという方法をとるようになりました。

《祈るべき天と思えど天の病む》（石牟礼道子）

《地の罪にふれしごとくに消えし雪》（中正）

前者は石牟礼道子句集『天』の中の句で、もちろん水俣のことを詠んでおられますが、石牟礼さんの近代批評は通り一遍のものではない、「原罪」に近いものがあることが、この句からわかります。後者の私の句は、これをなぞったような句ですが、やや客観化したところがあります。

（４）石牟礼道子研究へ——「危機の思想」——

石牟礼道子論（四〇〇〜五〇歳代）

こうやって石牟礼さんの研究をはじめましたが、一番印象に残っているのは、石牟礼さんの著作の英訳者や全国の研究者を

招いて開いたシンポジウムです。『苦海浄土』のリヴィア・モネさん（現・モントリオール大学）や『天湖』のブルース・アレクサン（現・清泉大学）たちですが、モネさんには叱咤されたり励まされたりで、いい勉強になりました。アレクサンは、みごとな英訳を出版されました。しかし、それ以来石牟礼研究シンポを開いていないことを反省しています。さらに、熊本県からの依頼で開いた公開講座「石牟礼道子の世界」（のちに同名の本として、弦書房から出版）も印象深いものがあります。私の手に負えないので渡辺京二先生の力を借りて、私、渡辺先生、原田正純先生、緒方正人、伊藤比呂美、伊藤洋典、高峰武ほか各氏のメンバーによる一〇回の講義でしたが、原田先生は既に故人となりました。

こうして私は石牟礼研究を続け、これを平成一九年に『ロマン主義から石牟礼道子へ——近代批判と共同性の回復』（木鐸社）にまとめ、熊大の出版助成で刊行しました。実際、前著から一七年もかかったことになり、反省もしていますが、やはりそれなりの苦勞もありました。本書についての書評は、たとえば、栗原彬書評（週刊読書人、二〇〇七年六月一日）や渡辺京二書評（熊日新聞、二〇〇七年六月二日）をご覧ください。

そこで次に、この石牟礼研究を中心とする私の現代思想に関する最近の問題意識を、平成二四年二月一日に、熊本大学大学院社会文化科学研究科のFD委員会の千島教授のおはからいで開かれたFD研究会で概略述べましたので、以下に「危機の

時代を考える——石牟礼道子の思想」として紹介します。

「危機の時代を考える——石牟礼道子の思想」

私は、今日が危機の時代あり、時代は危機が大きければ大きいほど、それを解決する大きな思想（家）を必要としており、それがまさに石牟礼道子さんだと思っています。つまり、「思想」とは、時代の危機の解決策（処方箋）であり、それは、より深い解決策をもった根源的な思想家によって担われています。つまり、真の意味での思想家はすべて「危機の思想家」であって、今日の3・11の原発事故、さらにはいずれもカタカナで書かれる「ミナマタ」、「ヒロシマ」とたどることのできる危機の根源は、「近代」そのものの行きづまりにあります。私は、この重大な課題を水俣を通して取り組んで近代を超える独自の文学、世界観、思想、さらにはこの文明の未来像まで描き得た危機の思想家、体系的思想家として、石牟礼道子さんを位置づけています。石牟礼さんに『不知火——石牟礼道子のコスモロジー』という本もありますが、石牟礼さんは、このジャンルその分野というようにして接近する思想家ではなく、また、ひとつのワールドというより、ときに整合的合理的で、ときに多面的で混沌と生き生きとしたコスモス（宇宙）としての思想家だと私は思います。以下私は、主として石牟礼道子さんと後述する時代の脱近代パラダイム転換を素材として、今日の危機の時代の根底にあるもの、およびそれからの回復策について、「時代」「思想」

「政策」の三つの側面からお話しします。

(1) 時代：危機の根底にあるもの——近代（化）の光と影

今日の危機は、私たちが行きついた究極の近代（化）の光と影のうちの、影に起因します。私たちは、「近代の終わりの始まり」といわれた一九六八年以来の近代批判と脱近代の時代に生きています。時代の価値観が大きく転換する中で、私たちは「近代」とは何か、についてあらためて問われています。そこで、近代とは何か、これをキーワードでいいますとそれは、自我（中心）、自由主義、功利主義、進歩、物質的豊かさ、機械論的自然観、近代合理主義、科学技術、所有、市場経済、資本主義、議会制民主主義などです。これらの意義と問題については、藤原保信先生の最後の著書である『自由主義の再検討』ほかを御覧下さい。

そこで私は、この現代の危機は基本的に、近代化による一切の関係（共同性）の崩壊にあると見ています。それは自然、社会、自我における三つの関係崩壊ですが、第一には人間と自然の関係の崩壊です。つまり私たちは、人間の自我を中心とする近代の認識の方法、科学革命や機械論的世界像によって、本来自然の一部であった人間が自然を支配しこれに労働を加えてそこから富を引き出してこれを蓄積するという方法を生み出して以来、人間と自然の調和的關係が崩壊して、たとえば環境・資源・温暖化その他人間の生存に関わるグローバルで危機的な状

況が生まれました。ヒロシマもミナマタも3・11の原発事故もすべて、この関係崩壊の象徴です。

第二に近代化は、人間と人間の関係を目的的で功利的機械的なものに変えていきます。ここでは、目的としての人間というより組織化機械化道具化された人間の関係となるとともに、共同体を基礎づける共通善や共通の価値観が崩壊していきます。これを石牟礼さんは、「基層民」の徳義や倫理の喪失といっています。

第三には、人間における自我と身体の関係の崩壊です。これは、心身の分離と崩壊という現代の病です。石牟礼さんは、人間の身体は自然の一部であって、これを通して人間は自然とながっていると言われます。つまり、心身の関係の回復と身体性の文学が、ここでめざされているのです。

こうしてみますと現代の危機の象徴としての水俣で起こったことは、近代の果てのこれら三つの関係の崩壊です。つまり、水俣病によって人間と自然の関係の崩壊だけでなく、社会（つまり地域）の關係が寸断されていきました。つまり、『苦海浄土』や新作能「不知火」の中で石牟礼さんが言う現代の「危機」とは、「原罪」とまで糾弾される「近代」であり、かつてすべであるべきものがそこにあった、「存在」の危機であり「存在」の崩壊なのです。

(2) 思想：どうやって再生するか

以上の「存在」全体にわたる崩壊という現代の危機から私たちはどのようにして再生したらいいのか、私は石牟礼さんの思想を通して、三つの面から考えています。

① 歴史をどう見るか

まずは時代を相対化して文明史のスパンで見ること、つまり歴史の視点が重要です。その点からいいますと今日、近代以来の進歩史観から、脱近代の持続可能社会ないし縮小社会へと進みつつあることは誰の眼にも明らかです。つまり、歴史をどう読むか、この点は私は学生時代に歴史の中の聖書をどう読むかということを考えていましたので、その問題意識との連続であり、それはのちに丸山真男の歴史意識の古層研究や渡辺京二先生の歴史論への私の関心へもつながります。たとえば有名な渡辺先生の『逝きし世の面影』のように、歴史をふり返って未来を考えるとという歴史意識や歴史的想像力がいま私たちに求められているのです。この点で、やはり私に大きな示唆を与えたのは、ロマン主義の歴史意識、とくにルソーの歴史思想——つまり一方で『学問芸術論』から『人間不平等起源論』という没落史観であり、さらに同時に『エミール』や『社会契約論』によって人間と社会を再生させるという再生史観がもつダイナミックな歴史意識でした。私は、その研究者が何をめざしてどんな研究をするかは、結局、その人の歴史意識——歴史をどう見るか——にかかっていると思います。私の石牟礼研究の基底にあるのは、

こうしたダイナミックな歴史意識であって、私はこの視点から時代の再生について考えてみたのです。

② 共同性（絆）をどう回復するか

もちろん私は現代の政治哲学の最大の課題である共同体論に関心はありますが、私の仕事は石牟礼さんの思想を通して、現代思想史の文脈の中で共同性の回復について考えることでした。問題は、前にも述べた「存在」の崩壊から再生へということですが、ここで私はワーズワスの詩「カンバーランドの乞食」を思い出すのですが、ワーズワスは、村の一人一人は皆、近代的功利的価値観からは一見無用に見える乞食でさえ、すべてそこになくしてはならない「存在」であって、そのすべてが存在の安らぎの中にあることが大事だということです。他のところでも述べたことがあります、「近代」とは大きな「全体」や「存在」から一切が分離分解し崩壊していくことです。「近代」とは、たとえば認識では認識の主体と客体というような一切の「対立」でありF・ベーコンが言うように知の「力」です。これに対して石牟礼さんが主張していることは「和解」であり、連鎖する大きな生命・時間・存在の世界への回復であって、この回復を通して一切の存在が、その生命と時間と存在の意味を回復するということです。このことによって、現代の危機である人間と自然、人間と人間その他一切の関係性共同性を回復すること、および今日失われた徳義、共通善、公共性、身体性を回復することを石牟礼さんは願っているのです。以上の点につ

いて私は、「熊本法学」第一一五号の論文「石牟礼道子における存在の回復」の中の、『天湖』についての私の研究である「存在の回復と和解——存在の意味の復権」で、石牟礼さんが描いたダイナミックな「存在」の世界についてふれていますので参照してください。

③ 一人一人がどう変わるか——新しい感性・知・ふるまい

こうして「存在」や共同性の崩壊を問題とし、これをどう回復すべきかということを考えてきましたが、問題は具体的にどうしたらいいかです。実はこの点で、私には私の思いがありまます。私は現実の日本の政治についてくわしくはありませんが、それでももう何十年も「政治学」の授業も担当せねばなりませんでした。もちろん研究をふまえた講義ですので理論的でなくてはなりません、それにしてもこの仕事は私にとって実感の得にくいものでした。というのは、いうまでもなく政治は決して政治で完結するのではなく、それを担う人間の思想やありようおよび文化を抜きには考えられないからです。「政治」や「政治学」は、社会や歴史のありようや転変の結果ではあっても原因ではないし、また、すべてはその政治を動かす主体のありようや意識、価値観の問題に帰着するような気がするので。私は、「イデオロギー政治」を決して支持するものではありませんが、それにしても今日のこの利益政治を見るにつけ、しみじみ政治学の無力を思います。石牟礼さんの思想を政治学から見ると、これは政治への絶望から出発しています。石牟礼さん

が提起していることは、政治は政治によってでなく人間の回復、つまり私たち一人一人が変わること、新しい感性・知・ふるまい・文化を回復することからしか始まらないということであり、すなわちこれは、新しい文明論であると思います。水俣病という近代の極限の病を見てきた石牟礼さんの感性が、そのように訴えていると私は思います。大学というアカデミズムも世間も、よく「文学」といったり「政治」といったりして分類しますが、私たちが扱っているのは、目の前にいる「人間」であり「社会」であって、その苦悩を解決するのに学問的ジャンルなど関係ないことは言うまでもありません。つまり政治の問題は、人間の物語としての文学そのもの問題でもあるわけです。

そこで、人間が変わるとはどういうことか。それは第一に、自我論の転換です。近代の自我論はデカルトのように、世界・宇宙の中心としての自我中心主義です。しかしそれは間違いなくひとつのフィクションであって、私たちは今日、自我とは諸関係の束にはかならないし、ハーバースマスがいうように真理はコミュニケーションの中にあることも知っています。そこでの豊かさやまた、自我が所有するものや力の豊かさから、内面や関係の豊かさへと転換しつつあります。第二に、このような諸関係を通して、私たちの感性も変わらねばなりませんし変わらつつあります。近代がデカルトの合理主義・機械論の世界であるとすれば、脱近代の今日はパスカルの繊細の精神の時代です。やわらかな感性や間（あわい）や気配（けはい）という、近代

化によって私たちが失ってきた空間や場をどう回復するかが、今日の課題です。私が石牟礼さんの文学を読んで一番に感じるのは、自我を超えたものあるいは自我以前の根源的なものの気配です。そして同時にまた大事なものは、これらの自分以外の他者や大いなるものを感じとる繊細でやわらかい感性や想像力、共感能力の回復ですが、石牟礼さん自身、自分のことを、何もできないがせめて悶えて加勢する「もだえ神」と呼んでいるように、とくに『苦海浄土』の「ゆき女さき書き」をはじめとして、石牟礼文学は共感の文学とよぶこともできます。さらに石牟礼さんのいう想像力は、個人の能力であるとともに集団のものであることも大事なポイントで、それは石牟礼さんが描く、たとえば『天湖』に見るような、集団で共同世界像を夢みる力やもうひとつの世界（「じやなか娑婆（しゃば）」を夢みる力に他ならないと思います。またそれは神話化の力ともよべますが、この力を私たちは取り戻さねばならないと思います。

(3) 政策と地域——どうやって実現するか

以上、時代の危機とは何か、これをどう考えるかについて私は、石牟礼さんの思想を通して考えてきましたが、問題は、時代の課題を具体的にどう解決し新しい社会をどう実現するかにあります。もちろんこの問題は石牟礼さんの思想の範囲を越えますが、私自身、法学部の他に大学院での担当もあって、「政策」や「地域」に関心をもち続けてきましたし、これもまた思

想史がかかわるべき課題だと思ってきました。

つまり思想史には二つの役割があって、ひとつは「史」として歴史的思想史的文脈の中で現代と現代の課題を明確に位置づけることです。これまで私が「危機の時代」やこれに対応する、たとえば石牟礼さんのような「危機の思想」について述べてきたことは、今日の脱近代パラダイム転換の中で自分たちの立ち位置をはっきりさせ、解決すべき問題を明らかにするためでした。その点で思想史は、時代を照らす灯台のような役割りをもっています。と同時にもうひとつの思想史の役割りは、それを貫く、たとえば欧米起源の市民社会原理のような普遍的価値を明らかにすることにあります。その意味で思想史は、いわば人類の知的遺産としての「価値」をどう現代と未来に生かすかという役目ももっています。そのことをはっきり示してくれたのは、次に述べる「脱近代パラダイム転換」でした。つまり私は、近代の政治の国家枠組みや功利主義、自由主義および利益政治の構造には限界があって、これを超える新しい政治のパラダイムが必要だということに、思想史と政治学を学び教えてきて気づきました。さらにその上に既に述べましたように、政治は政治によってでは変えられない、思想、ふるまいすべてを含む人間のあるりようから変えていかねばならないし、これは、政治、思想、文学などというジャンルを超えてすべてを含む知の全体のパラダイム転換から考えなくてはならないと思ったのです。

具体的には、従来の「政治」から「政策」への関心が私の中

に生まれてきました。もちろん「政治」（学）は大切ですが、どうも国家や権力という近代の「大きな物語」中心になりがちです。で、さらに具体的な幸福実現の手段としての「政策」（学）が必要で、大学にもこれが求められていると思っただけです。しかし政策はあくまで手段ですから、これには政策目標としての価値論が不可欠で、ここに時代のパラダイム転換の照準を合わせる必要があると思っただけです。そこで私は、学部では「公共政策学科」の設置に努力し学科長もつとめました。この学科は短命でしたが、しかし私がこの「公共」という名にこめた公共哲学への思いを、今はなつかしく思い出します。同時に大学院でも政策学のニーズがありはしないかと、米国の政策大学院へ行つて調査したりしました。また私は大学院で、「政策価値論」という科目を開講しました。これには思想史Ⅱ「価値Ⅱ」政策という三位一体の思いをこめました。やはり専門の違いもあって、しっかりとした体系化はできませんでした。

そこで一番問題になるのは、こうした政策の目標や価値のパラダイム転換ですが、この点には最も関心をもちました。ところが、思想史研究の出番だからです。具体的には戦後日本の政治が行きついた先は、究極の利益政治でした。これは「近代」が行きつく先でもあって、ほどなく「利益」から「人間」へとという形で転換を迫られるものであって、「ミナマタ」や一九六八年がその予兆でした。ここから時代の価値・目標は、いのち、生活、共生、環境、文化といった脱近代的なものへと転換しは

じめましたが、他方私たちにとって自由主義や利益主義は今なお間違いなく価値の中心であり続けていますので、これをどう変えよう再構築するかという時代にはいつてきました。そこで今日、この新しい脱近代的価値を実現するための政策の方法の転換へ向けて、参加、熟議、公共性、共同性、地域民主主義など、合意形成の方法について研究が進んでいることは皆様御存知の通りです。私は専門は思想史ですが、清正寛、吉田勇、伊藤洋典といった、文字通り研究室の近隣の諸先生方及びその他の先生方の刺激を受けながら、しかもちょうどこの転換期に、自分の関心をひろげつつ楽しくのびのびと勉強できたことに感謝します。

なお、これら政策（研究）の場としての「地域」への関心については、後述します。

（5）脱近代へのパラダイム転換の研究

（五〇〜六〇歳代）

以上、近代的価値から脱近代的価値へのパラダイム転換についてはかなりお話ししましたが、もう少しつけ加えておきます。一九九五年という早い時期に、もう故人となられた政治史の岡本宏先生のおよびかけで、私は「一九六八年——世界史の転換」の共同研究に参加し、その思想転換の部分を担当しました。このテーマは、その後最近、文字通り世界的に研究がはじまって、

岡本先生の卓見には驚かされますが、以来私はこの思想転換は政治だけでなく学問の多くの分野にまたがるパラダイム転換であって、転換の中心軸は「近代」であると考えました。学内ではこのテーマはとりあげられませんでした。幸い一九九六～九八年の科研費（B）「近代化の再検討」で採用になり、その成果は私の石牟礼研究の著書に収めました。当時の中村直美先生との共編著『転換期の法と政策』といった書名にも、この時代転換への思いがあります。この時代転換への私の関心は、近代の思想的再検討という形では、私の石牟礼研究やこののちの虚子研究へ、フィールドとしては「公共政策」や「地域」への関心へと向かいました。石牟礼研究や公共政策については既に述べましたので、「地域」について少しふれたのち、虚子研究について述べます。

この「地域」への関心は、吉田勇先生が構想された大学院設置計画から教えられたものです。それはちょうど近代（化）の中央集権の近代主権国家に対する地域の浮上という時代の反映でもありましたが、これも脱近代パラダイム転換の一部でありました。さらに共編の『地域公共圏』の政治学』を編む過程で伊藤先生からも地域について学びましたし、山中進先生に連れられて地域研究のフィールドに入って学んだことなども、感謝することばかりです。さらにまた「地域の時代」を迎えて大文学も地域貢献を重視しはじめ、私も熊本大学生涯学習教育研究センター長や附属図書館長などの仕事を通して、さらには図書

館が寄託を受けていた細川家永青文庫を中核とする熊本の文化による地域おこしの「熊本ルネッサンス運動」にかかわったりしました。その間の五～六年間毎月の研究会で、小堀富夫さんや吉丸良治さんほか多くの地域の文化リーダーの方から色々教えを受けました。その他熊本市の文化事業では、熊本城四百年事業や、もう一八回になる「草枕」国際俳句大会のお世話など、地域と文化政策について考えるきっかけをいただきました。

私は平成一一年に俳誌「阿蘇」主宰を引き継いだこともありまして、文芸における地方分権にも深い関心をもつてきました。文化の中央集権にはなお強力なものがありますが、そのことを論じるより、私たち自身のアイデンティティとして地域文化を守り育て、文化によって地域を形成する努力を怠つてはならないというのが私の結論です。まさに「はじめにことばありき」というように、「ことば」による地域形成や地域思想の可能性について考えつつ、私もいくつか論文を書いたこともあります。何よりの成果は、県内の俳句作家によびかけて、地域の風土に根ざした『新くまもと歳時記』（熊本日日新聞社）を出版したことで、これは一年間の新聞連載を基礎にした事業でした。こうした仕事を通して私は、新しい地域の時代のエネルギーを膚で感じてきましたが、最近はその勢いにややかけりが見えてきたことが心配です。

(6) 脱近代の文学・高浜虚子研究 (五〇〜六〇歳代)

以上の政治や思想の脱近代へのパラダイム転換と並行して、私はロマン派や石牟礼道子さんの研究とともに、戦後、現代俳句から古いと言われてきた高浜虚子の花鳥諷詠思想という一種の自然随順の思想の再評価をはじめました。そもそも今からもう二〇年も前の真宗寺での講義が発端で、その後俳誌に書いた講義や講演したりしつつ考えをまとめてきました。私はまず、虚子をたんなる俳句作家としてだけでなく一箇の思想家と位置づけました。また三好行雄教授は虚子を近代思想と定義しましたが、私はさらに積極的に、虚子を脱近代的世界観をもった思想家として、時代のパラダイム転換の中に位置づけて、次の時代をさし示すひとつの世界観を紹介しました。それは、過剰な近代化と人間中心の世界観に対して、私たちが自然や人間との関係性を回復し自我を越える生命的有機体の世界、つまり本来あるべき「存在」の世界に回帰して本当の自立と安心を得る思想ではないかと考えたのです。つまりたとえば、近代的自我中心の現代俳句が、

《蜜籠われに安心あらしめよ》(石田波郷)

《死ねば野分生きてゐしかば争へり》(加藤楸邨)

といった、西洋の近代文学につらなる自我の不安と葛藤の文学

であり、「安心あらしめよ」という文学であるのに対し、虚子は、

《遠山に日の当たりたる枯野かな》(虚子)

《去年今年貫く棒の如きもの》(虚子)

という、没我を通しての自然との同一化と絶対的「安心そのもの」の世界を体現する思想家だと定義しました。この虚子の近代的自我を超えた自若としたゆとりある生こそ、近代後の生き方ではないかと私は思ったのです。

このような虚子の理論的再評価は、最初『転換期の俳句と思想』(朝日新聞社)の「花鳥諷詠と現代」の章で示しましたが、その後、山本健吉文学賞を得た『虚子と現代』(角川書店)でさらに体系化しました。この『虚子と現代』の主張については、さらに「岩岡さん『虚子と現代』」(熊日新聞、二〇一一年六月三日)のインタビュー記事や「うたをよむ」「いま求められる虚子」(朝日新聞、二〇一二年七月八日)の拙文を御覧ください。私はこうして、これまで前近代思想と言われたものに対して、これに反近代からさらに脱近代の新しい世界観という再定義を与えたわけです。

(7) 近代後の再構築と子規研究——「近代後の近代」あるいは「第二の近代」(六〇歳代)

しかし、この虚子の再評価には課題もあります。まず、客観写生と自然随順という形で自我を没却して「花鳥」(造化)という大きな自我に没入するという虚子の方法には、虚子という天才の境地ならともかく、一般の人々には、そもそも主体性や社会性を欠きはしないか、安易な他力本願に陥りはしないかという疑念が払拭できないのです。そこで私はすでに「虚子と現代」の中で「子規から虚子へ」に対して、「虚子から子規へ」として再び正岡子規に回帰する、つまり脱近代へ向けて「近代の原点」である子規に立ち戻ることが必要だと述べておきました。しかし、それはもちろん、単なる回帰ではなく、歴史発展の法則にしたがって螺旋状の近代の原点への回帰です。つまり、もうひとつ上のサイクルでの回帰で、これを「近代後の近代」や「第二の近代」ともよぶことができるでしょう。

つまり私たちは、脱近代の世界観である虚子の思想をふまえて、この世界を構築する力をもった「近代」(あるいは市民社会思想)の原点ともいうべき子規に再び注目しなければならぬのです。近代を超えて脱近代のヴィジョンを実現するために、近代の原点のエネルギーが必要なのです。その視点から私は、子規の近代性(モダン)に焦点を当てて、この子規の現代的意義について考えて、この三月に『子規と現代』(ふらんす堂)を出版

しました。この出版に際して熊本大学から再び学術出版助成をいただきましたことを、心から感謝致します。

おわりに——思想史の楽しさ

以上、危機の時代の危機の思想家としての石牟礼道子の研究を中心に、私の思想史の旅のお話をしました。やや客観性を欠いた独白のようなお話で退屈されたかと思いますが、これでも本人はその時々悩みながらも楽しい研究生活を送らせていただきました。ここには、第一に、時代の危機に因應する、いつも根源的で新しい解決策をもった詩人としての思想家たちと、その課題を共有しその解決を体験する楽しさがあります。しかも人間本性というものはどの国でもどの時代でもそう変わりませんで、この危機の課題もその解決策としての「思想」も、歴史上くり返し現れたり他地域で現れたりします。そこに、思想における古典に学ぶ楽しさがあり、思想の共時性や伝播の面白さがあります。第二に、この思想史の旅には、「近代の終わり」から近代批判へ、そして「もうひとつの近代」としての新しい脱近代へと再帰的に展開する歴史と思想のサイクルとダイナミズムを共に旅をしつつ読み解いていく楽しさがあります。

いずれにしてもこの三三年の間、自由に楽しく思想史の旅をさせていただきましたことについて、熊本大学とりわけ法学部、さらにはこれまでも今も導き支えて下さっている師友、仲

間、家族に心から感謝します。最後に今の私の思いを、かつて私が作った俳句を用いて述べますと、次のようになります。

《うかと飄^{ひまじ}うかと青春過ぎにけり》（中正）

《来し方もまた野遊^{のあそび}のやうなもの》（シ）

（注）本稿は「知の伝承」シリーズ⑧（熊本大学大学院）社会科学部文化科学研究科FD委員会、二〇一三、三、二九）に加筆・修正を加えたものである。